

かも 市史だより

平成25年10月
No.28

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

下条・稻荷神社の役行者像



▲ 文化7年（1810）造立の2体と像底の墨書



▲ 嘉永7年（1854）造立の2体と像底の墨書

稻荷神社宮司・金谷家の御神体を祀る檀上に、神社の前身である大龍院（修験）時代のものと思われる役行者（役小角）像四体が並んでいます。役行者は奈良時代の山岳修行者で、吉野の金峰山・大峰山を開いた修験道の祖といわれ、鎌倉時代末期以降彫刻や絵画に多く作られています。

四体は、それぞれの墨書から文化七年（一八一〇）と嘉永七年（一八五四）に造立された二組からなっています。このうち、彩色された文化七年像（高さ約六〇cm）は僧形・山伏の二像とも右手に金剛杖をもち、左手は膝上で経巻を握り、岩座に腰掛けて、両足を開いて一本歯の高下駄を履いています。ヒノキ材の寄木造で内削りは施していません。僧形像（右）は角頭巾を被り、法衣の上に袈裟を掛けていますが、山伏像（左）は頭巾を被り、結袈裟をつけ、太刀を佩き、袴・脛巾を着用した修験者の姿を表しています。

なお、簡素な造りの嘉永七年像（高さ約三〇cm）は、その墨書から阿賀野川下流左岸の一日市村（新潟市東区）の住人が寄進したことがわかります。江戸時代末期における大龍院への信仰の広がりを感じることが出来ます。

（文化財部会 羽二生寛興）

新発田藩の延享の地改めと藩財政

江戸時代中期、新発田領の村々は重なる水害に見舞われ、財政は著しく逼迫します。この窮状を打開した藩の年貢増徴策を、市内の史料から解き明かします。

溝口内匠の「新趣法」

享保年間（一七一六～三六）の新発田領内はたびたびの大雨で洪水となり、そのつど支配高の六割を越える被害を出し、財政は火の車状態となります。大坂の蔵元商人からの借金は嵩み、家臣からの俸禄借上は元文元年（一七三六）にはついに半知（半減）となります。

このため元文二年に勝手方元へに家老の溝口内匠が就き、「新趣法」と呼ぶ改革を始めます。その柱は徹底した儉約と農民からの年貢をどう増やすかにありました。儉約では諸役所の統合から在方の組の見直しまで行い、加茂組こそ従来通りでしたが、蒲原組と横越組、新津組と小須戸組を統合するなどしています。

表1 寛保2年(1742)上条村「内改め」の年貢斗代

年貢斗代(石)	面積	定納高(石) (斗代×面積)	等級
8.50	7町2反半11歩	71.6531	上ノ上田
8.00	7町大12歩	56.5600	上田
7.80	11町4反半1歩3尺	80.1526	
7.70	1反大6歩	1.2961	上ノ中田
7.15	2町4反半22歩	17.5611	中ノ上々田
6.93	5町6反小36歩	39.1081	中ノ中田
6.61	5反74歩	3.4480	中田
6.38	3町3反半57歩3尺	21.4749	中ノ下田
5.92	8町7反大92歩3尺	52.0507	下ノ中田
5.56	3反小33歩3尺	1.9003	
5.39	1町2反小17歩	6.6730	下ノ中々田
5.30	1町7反大25歩3尺	9.4009	下ノ下田
4.85	3町8反24歩	18.4624	
4.00	1反2歩	0.4000	
3.00	9反半25歩3尺	2.8712	下ノ下々田

- (1) 斗代は1反当たりの年貢高のこと。史料は年貢斗代別に該当面積を書き上げた体裁を取っている。
 (2) 等級は寛政5年(1793)「加茂組明細帳」(本町古川洗氏所蔵)により補訂。

表2 延享地改めによる増定納高

名称	増分(単位:石)
蒲原横越組	3,008.9500
赤洪組	1,630.9019
中ノ口組	1,400.5319
鶴森組	562.3700
新津小須戸組	1,840.4094
大面組	472.3500
中之島組	2,001.8085
加茂組	861.9800
川北組	664.3500
五十公野組	512.0000
新発田組	580.4000
合計	13,536.0617

新潟市秋葉区 眞柄慎平氏所蔵「新津組諸用控」から作成

新田などの汲み上げで貢租賦課地の増加をねらったものでなく、面積はそのまま向上していた生産性を考慮して取米強化を図ったものであることがよくわかります。藩は翌寛保三年から延享元年(一七四四)にかけて、この斗代を田畑一筆ごとにあてはめた「田畑小前打立帳」を作成させて地改めを終了します。これで藩は一挙に一万三五〇〇石余の年貢を増やし(表2)、財政再建を成功させます。(表近世部会 佐藤賢次)

寛保・延享の地改め

窪田の登用は「地平均」とか「増減石」と呼ぶ田畑の生産性を見直す「地改め」実施のためです。窪田は寛保元年(一七四一)、どれ

上条村絵図を読む

「内改め」の結果を書き込んだ上条村の絵図が市立図書館に保管されています。これを見ると、それまで上・中・下・新田の四区分であったものが上ノ上から下ノ下まで一五区分されたことがわかります(表1)。例えば、従来七斗代だった上田は八斗五升から七斗七升に、六斗代だった中田が七斗一升五合から六斗三升到、それぞれ引き上げながら細分しているのです。ここにこの地改めが新たな



▲ 寛保2年(1742)上条村絵図(部分) 上条村で行った「内改め」で書き出された新しい等級別年貢高が載っている(加茂市立図書館所蔵)

七谷の寒念仏供養塔

寒念仏信仰とは

小寒（寒の入り）から立春（寒の明け）までの、一年中で一番寒さの厳しい期間に行う修行を寒行（かんぎょう）といいます。寒行には①寒参り（詣り）、②寒念仏、③寒垢離などの方法があります。寒参りは、社寺に願掛けをしてお百度を踏むなどして祈願します。寒念仏は鉦（かね）を打ち念仏を唱えながらムラを巡り除災します。寒垢離は、寒中に水をかぶったり滝にうたれたりする修行であるなど、行法はさまざまです。大寒の頃は特別に寒さが厳しいため、この時期に修行をして、霊的能力を高めようとしたのです。

◀ 下大谷・三柱神社の寒念仏塔
宝暦三年（一七五三）。建立年が明らかでない寒念仏供養塔では市内最古の一基。



寒念仏の名称は、念仏講中が盆に念仏を唱える盆念仏と区別した言い方でもあります。

寒念仏信仰とは、寒行をするこゝとで備わった霊力と念仏の力で災厄を払い、病氣回復などの祈願成就を達成する信仰と定義できます。

寒念仏供養塔の分布

加茂市では七谷の各集落に寒念仏供養塔の存在が確認されます。七谷地区の寒念仏供養塔は約四五基あり、これらの供養塔の存在から、この地に寒念仏信仰が古くからあったことがわかります。



供養塔の銘記は「寒念仏供養塔」が一番多く、次いで「寒念仏塔」

「寒念仏」などがみられます。塔には阿弥陀如来の種子（梵字）を刻んだものが多く確認されます。

一番古いものは下大谷にある宝暦三年（一七五三）の寒念仏塔です。

造立場所は、神社の境内や隣の集落との境の道路に建てることが多いようです。ムラでは、「村内に悪い病気が入らないように守ってくれる」といっています。外からの災いを防ぐという防災祈願が込められていると理解されます。

寒倉供養塔の建立

寒念仏供養塔のなかで特に注目すべきは、わかるものだけで十八基ある寒倉供養塔の存在です。

寒倉供養塔は七谷地区から旧村松町・五泉市・旧笹神村までの旧街道沿いにある山麓の集落を中心に建立されています。供養塔の銘記は「寒倉供養塔」が一番多く、次いで「寒倉塔」「寒倉権現」などがみられます。その多くが寒倉大権現を信仰する寒倉講の講中によって建立されています。年代が判読できるうち、一番古いものは宮寄上にある「寒倉大権現供養（塔）」で、文化十四年（一八一七）の刻字があります。最も新しいものは昭和五、六年に建てられた三基で、いずれも願主は茂野勝弘という人物でした。

寒念仏塔と寒倉塔の建立年を比較してみると、寒倉塔は寒念仏塔より新しい年代のものが多く確認できます。寒念仏信仰のなかでも、寒倉信仰は時代的に新しいことが推測できます。

（民俗部会 岩野笹子）

◀ 西山の寒倉供養塔 昭和六年（一九三一）。市内の寒倉供養塔で最も新しい。



▲ ムラ道沿いの石造物 黒水西。江戸時代中期以降庶民信仰は多様化し、除災と招福の祈願にさまざまな石造物が建立された（スケッチは高橋貞二氏提供）。

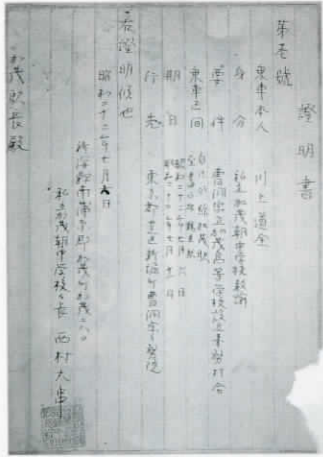
加茂高校と加茂暁星高校の校名

加茂高校といえは幸町に敷地を構える県立高校のことが浮かびます。しかし、戦後の一時期、もうひとつ同名の学校がありました。

加茂暁星高校は、松坂町の大昌寺（曹洞宗）の住職西村大串が大正九年（一九二〇）創立した加茂朝学校を前身としています。朝学校は昭和十二年（一九三七）に中等学校となり、十八年には加茂朝中学校へと改称します。

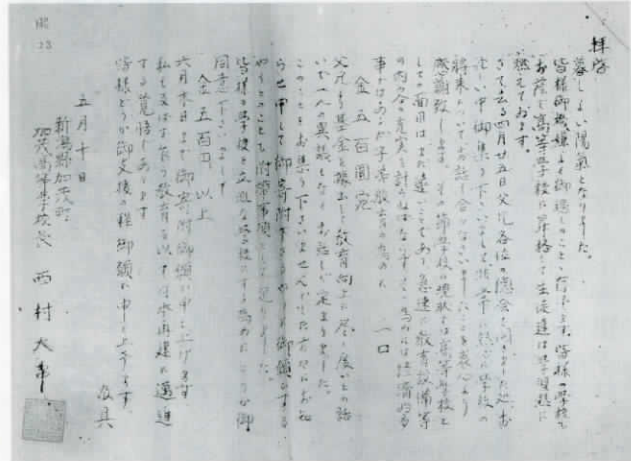
昭和二十二年、学制改革に伴い朝中学校から高校への移行を求められました。この時期に学校を宗立にする構想も浮上し、同年七月には東京の曹洞宗宗務院で「曹洞宗立加茂高等学校」の事務打合せが行われます（左写真）。しかし、

▲宗立への移行事務打合せの文書（本稿掲載の写真はいずれも加茂暁星学園所蔵）



西村校長自身は宗立へ移行するか否かで迷っており、同年十月、来県された昭和天皇へ御進講したことをきっかけに宗立化の構想を改め、昭和二十三年四月に新制の私立加茂高等学校が誕生します。

現在の県立加茂高校は、昭和十七年から県立加茂高等女学校となっており、二十三年四月には新制の加茂女子高等学校と改称している。▲新制高校への移行につき保護者あて寄付依頼状「新潟県加茂町加茂高等学校長 西村大串」となっている。



ました。しかし、同校が翌年四月から男女共学にして、新潟県立加茂高等学校への改組を打ち出したことで波紋が生じます。西村校長が校名の変更を求める県教育委員

文部省が歌詞を訂正した 七谷尋常高等小学校の校歌

昭和四十年（一九六五）に新校歌ができるまで歌い継がれた七谷小学校の初代校歌は、上黒水の笠原正男学務委員（現在の教育委員）の寄附によりつくられ、昭和十五年（一九四〇）十月一日に発表会が行われました。作曲は下総院一

ノ上認可セラレタル」とあり、歌詞五か所が赤鉛筆で訂正されています（七谷小学校所蔵文書）。この後、訂正された歌詞で歌い継がれましたが、訂正前をカッコ書きで紹介いたします。比較してください。

者とも東京音楽学校（現東京芸術大学）の教授で、戦後まで活躍し、多くの校歌を作っています。特に下総は、「ゆうやけこやけ」や「たなばたさま」などの作曲家としても知られています。

明治以来、戦前の全国の小学校の校歌は、すべて文部大臣の認可が必要でした。七谷小学校でも昭和十五年九月十四日に両先生から送られた歌詞・楽譜を添え文部大臣に認可を申請しました。ところが、認可は発表式に間に合わなかったばかりか、歌詞も訂正されていたのです。十二月十六日付の認可通知には「別紙朱書ノ如ク訂正

会の要求を容れ、釈尊の故事にあやかっ加茂暁星高等学校と改称したのは昭和二十四年一月のことでした。

（民俗部会 中山 勇）

- 一 希望が丘の朝緑（翠）
日本の國に生れたる
我等は心一にして
仰ぐは高き日章旗（伊よ）
- 二 前を流るゝ加茂川の（永久）
姿は清しとこしへに
我等の誇り我が村は
其の名も高き模範村
- 三 朝な夕なに仰ぎ見る
南に高き粟ヶ嶽
郷の鎮めと揺ぎなく
掲げん高く我が理想

（近現代部会 長谷川昭一）